

## 書評01

高橋博之 著

# 『都市と地方をかきまぜる 「食べる通信」の奇跡』

光文社 / 2016 年 8 月刊 / 230 ページ / 740 円 + 税  
ISBN 978-4-334-03936-3

評者：小田巻 友子  
松山大学経済学部講師



「食べる通信」とは、食のつくり手の生き様や哲学、世界観を特集した情報誌と、彼らが収穫した食べものがセットで定期的に届く食べものの付きの情報誌である。時には殻つきのままの牡蠣が、またある時には新鮮な魚が丸ごと送られてくる。消費者は送付のレシピを見ながら調理をし、食材とともに生産者の物語を味わうことができる。著者の高橋氏が編集長を務める「東北食べる通信」から始まったこの取り組みは、現在全国 38 の地域からの発刊へと広がった。食べる通信の特徴は、単なる生産者側の情報の提供にとどまらず、SNS 上で生産者と消費者の交流が行われ、都会で開催する交流イベントや、畑や海辺など生産現場で開催する現地ツアーで直接両者が触れ合うことができる点にある。

これまででも生産者の顔が見える食材というのは存在した。しかしその多くは、一方向の情報伝達に過ぎなかった。食べる通信はその伝達を双方向に、そして消費者と生産者の関係性を持続的なものに変えたのである。かつて政治家として地方の課題に向き合ってきた著者にその気づきを与えたのが、2011 年の東日本大震災であった。都市から地方に流れ込む多数の支援者の姿からは、都市では得られなかった「生きる実感」や「つながり」を手にする事への喜びがみられていた。本書では著者の気づきが以下のように綴られている。

「支援者と被災者は、よく見れば消費者と生産者だった。普段顔を合わせることがなかった

両者が震災を機に被災地で交わったのだ。私はあちこちで目にした。生産者と消費者がつながる一次産業の可能性、魅力、強さを。そして生産者を介して自然のリスクと向き合った消費者が当事者として覚醒する姿を。これを日常からやればいいのだと思い、『東北食べる通信』を創刊したのだった。」(本書, p.209)

著者は、本書の中で一人ひとりの選択が世の中を変えていくのだということを再三強調している。消費者としての私たちは、日々の暮らしの中でより安価なものを追求しがちである。そうした市場競争の中では、何を目的として、どのような方法で、何をつくっているのか、といった商品の価値と市場価格がどんどんと離れていく。自分が手にした選択が、世の中の価値観や生産の在り方に直結しているという意識が希薄化していることに本書は警鐘を鳴らすのだ。

評者はふと、著者の社会的アプローチは他の産業分野にも活かせるのではないかと考えていた。例えば、社会サービスの供給においても、利用者と専門家がサービス生産過程にかかわることがサービスの質や量を高める、とするコ・プロダクションという概念が存在する。医療サービスを例に挙げて説明しよう。医療サービスの供給においては、医師は医学的な専門知識や技術、経験に裏付けられた医療の専門家である。他方、患者は診察に至るまでの経過や現在の状態を最も知っているという意味で、自分の身体の専門家である。このように医療サービスにおいては、医師と患者の

どちらにも相手に見えにくい固有の情報が存在する。この情報の不完全性を解消するためには、両者が相互理解を深め、話し合い、納得した上で治療を行っていくことが必要である。つまり、患者もコ・プロデューサー（共同生産者）となること、よりよい質の医療サービスを提供することにつながるのだ。

同様に、本書の第3章では、「クレームゼロの奇跡」として消費者と生産者が相互理解を深めることの意義を紹介している。それは、東北食べる通信で、漁師の菊池さんがつくる「鈍子のつみれ」が猛暑や台風の影響で水揚げが遅れ、予定通り届けることができない旨を読者に報告したところから始まる。当初は読者からのクレームを覚悟していた編集部に届いたのは意外にも、自然を相手にして予定通りにいかないことへの読者の深い理解や生産者への応援メッセージであったという。ここにおいて、食べる通信の読者は単なる消費者ではなく、生産の当事者の一人となっていたといえよう。著者はこの感動に接して、つくり手と食べ手が直接つながり、生産の喜びや苦勞を分かち合うことで「おいしさが増すし、食を取り巻く課題の解決にもつながっていくはず」（本書 p.153）と綴る。

経済社会の発展は、市場における自由で対等な交換関係を生み出した。しかし人と人の依存関係の中で営まれてきた生産と消費は、ひとたび貨幣を媒介にした物と物との交換関係になるとそのなりを潜めた。都市と地方、消費と生産の場が分離するにしたがって、現代社会はしだいに「買ってあげる側」の消費者と「買ってもらう側」の生産者といった上下の関係を生み出してしまった。そのような状況において、本書は、消費することと生産することは、人と人の依存関係であることを今一度思い起こさせようとする野心的な試みである。

他方で本書は、消費者と生産者というミクロな関係を通して、都市と地方というマクロな関係にも言及している。著者は、週末に都市から

地方に通う「逆参勤交代」や週末や日々のくらしの中で「農」に触れてみる「一億総百姓化社会」など斬新な提案をしつつ、都市と地方を行き来する曖昧な生き方を思い切り良く肯定する。食べる通信をとおして生産現場の物語に触れ、調理をする。食べ終わったらSNSで生産者に感想を伝える。自発的に共感した生産者の下に出向き、生産の現場を見、体験し、酒を飲み生産者と語り合う。週末は田舎で農作業をする。都市にある体験農業で、自分のくらしの中に「農」を意識的に取り入れる。選択肢は多様である。都市か地方か、どちらか片方だけに根差すのではなく、どちらにも基盤をもてるような多様な生き方や社会のあり方を受け入れることこそが、都市と地方双方の行き詰まりに新たな道を与えるのだと著者は主張している。

最後に、本書の構成を簡単に紹介しておこう。

第1章では、著者が一次産業の生産者と出会う中で、人と自然のつながりを実感させる「食」の裏側を伝えることを通して、5K産業として忌避されがちな一次産業生産者の社会的地位を引き上げるアプローチを志すまでが語られている。

第2章では、豊かな社会が引き起こした孤立や日常の閉塞感から、「ふるさと」を地方に求める都市住民に目を向け、交流人口と定住人口の間に眠る関係人口を掘り起こす必要性を説く。

第3章では、消費者の「参加と共感」の回路として、「東北食べる通信」の創設から、食べる通信の広がり、そして通信からの卒業を決断した読者たちの変化の軌跡が示される。

第4章では、一次産業の根源的な力が、消費社会を生きる私たちの生活をどのように変えうるかを問い直す。そして、一人ひとりができる範囲で生産する側に参加することは、一次産業に限らず、日本が抱える課題解決の当事者側に回ることとイコールであり、世の中を変える一歩につながるのだと呼びかけている。

本書が多くの人々の目にとまり、私たちのくらしに少しでも変化が起こることを願っている。